



国際社会人叢書

1

鈴木靖／法政大学国際文化学部 編

国境を越えるヒューマニズム

大石智良 高柳俊男 北文美子 榎木玲子 吉川太恵子
大西 亮 岡村民夫 内山政春 佐藤千登勢



法政大学出版局

序 「国際社会人」をめざすきみに

いまから二十年ほど前、アメリカで出版された一冊の本が世界に大きな衝撃を与えた。ハーバード大学の国際政治学者サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』である。この本の中でハンティントンは、冷戦体制が終焉した後、世界は民族や宗教など文化的アイデンティティの違いが惹き起こす「文明の衝突」の時代を迎えると予言したのである。

不幸なことに、彼の予言は当たってしまった。冷戦時代の「イデオロギー」という枠組みを失った世界は、民族や宗教の違いによって、昨日まで平和に暮らしていた隣人同士が、互いに反目しあい、ときに激しく対立しあう時代を迎えてしまったのである。

それは極東の島国に暮らす私たちにも無縁なことではない。歴史問題や領土問題が再燃するたびに吹き荒れるナショナリズムの嵐は、外交関係だけでなく、経済活動や文化交流にも深刻な影響を及ぼしている。

こうした混迷を深める国際社会の中にあつて、文化を異にする人々と相互理解に基づく平和で豊かな互恵関係を築くことのできる人材は、社会のあらゆる分野において不可欠な存在となっている。法政大学はこうした社会と時代の新たな要請に応えるため、一九九九年、国際文化学部を開設した。そして、その人材育成の目標として掲げたのが、本叢書のタイトルである「国際社会人」である。

では、「国際社会人」とはどのような人材を指すのか。どのような能力や人格が求められるのか。その

育成にはどのような意義があるのか。本書をご一読いただく前に、まずはこの三つの点について述べておきたい。

「国際社会人」とは

人間は生まれながらにして文化的アイデンティティーを有しているわけではない。生まれたばかりの赤ん坊は、機械に例えればちょうど空っぽのコンピュータのようなもの。それが民族や宗教といった社会的ネットワークの中で文化情報を受信・選択・蓄積し、自らの文化的アイデンティティーを作り上げていく。

ところが、こうして形成された文化的アイデンティティーは、ときに文化を異にする者に対して独善的で不寛容なふるまいをすることがある。「自民族中心主義 (ethnocentrism)」と呼ばれるこうした不寛容さに付和雷同し、歴史の趨勢を読み誤ることが、いかに多くの不幸を生み出すかは、過去の歴史が多くの教訓を与えてくれている。

ところが、そんな時代の中にあっても、「人道、博愛、平等の精神に基づく行動により、国家、民族、宗教や時代の壁を超えて敬愛される人物」⁽¹⁾がいる。私たちはこうした人材を「国際社会人」と呼んでいる。

「国際社会人」に求められるもの

では、「国際社会人」になるためには、どのような能力や人格を身につける必要があるのだろうか。

国際文化学部の英語名称である Faculty of Intercultural Communication が示すとおり、「国際社会人」の役割が異文化間の円滑なコミュニケーションにあることはいうまでもない。本学部が正規のカリキュラムの中に必修留学制度を設け、外国人留学生を除く学部生全員が二年生の後期（短期の場合は夏休み）に世界の七言語圏十カ国のいずれかの大学に留学するのも、等身大の異文化体験に裏打ちされた実践的なコミュニケーション能力を身につけるためである。また、ICT（情報コミュニケーション技術）教育に力を入れているのも、現代のコミュニケーションの主要な媒体となり、国際世論にも大きな影響力をもつようになったこの技術についての理解を深め、創造的な活用を促すためである。

一方、人格形成の面で重視しているのが、「共感力（empathy）」である。

「共感力」とは「他者の思考や感情を理解し、それに適切な感情をもって反応する能力」⁽²⁾を指す。文化を異にする人々の思考や感情を理解し、それに適切な感情をもって反応することは、異文化間のコミュニケーションを円滑にするばかりでなく、ときには国家や民族、宗教、さらには時代の壁を超えて高く評価されるような判断と行動を可能にすることがある。その一つの例が、本書に紹介する杉原千畝である。

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの支配下では、女性や子供を含む六百万人ものユダヤ系住民が命

を奪われていた。そのドイツとの同盟締結を目前に控えた一九四〇年七月、リトアニアのカウナス領事館に赴任していた杉原は、ナチスの迫害を逃れてきたユダヤ系避難民の惨状に共感し、本国からの命令に背いてビザを発給したのである。

杉原は晩年、当時の心境をこう記している。

「最初の回訓「渡航条件を備えないユダヤ系避難民へのビザ発給を不許可とする本国からの命令」を受理した日は、一晩ぢゅう私は考えた。考えつくした。回訓を文字どおり民衆に伝えれば、そしてその通り実行すれば、私は本省に対し従順であるとしてほめられこそすれと私は考えた。」

杉原にも迷いがなかったわけではない。外交官である彼が、本国からの命令に背けば、昇進停止はあろうか免職になる恐れもある。とはいえ、本国からの命令に従ってビザ発給を拒否すれば、目の前にいる避難民たちはどうなるのか。

「苦慮・煩悶の揚句、私はついに人道博愛精神第一という結論を得た。そして私は、何も恐るることなく職を賭して忠実にこれを実行して見た。」

戦後、ホロコーストの責任者の一人として捕らえられ、イスラエルで処刑されたアドルフ・アイヒマンは、裁判の中で自らをこう弁護している。

「私はただ命令に従っただけだ。」

彼の言う通り、権威の命令がいかに人間の理性や感情を曇らせるかは、ユダヤ系アメリカ人の行動心理学者スタンレー・ミルグラムの実験によっても明らかになっている⁽³⁾。しかし杉原はユダヤ系避難

民の立場に立つて考えることにより、權威に盲従することなく、時代の評価に耐えうる行動を取ることができたのである。

近年、オランダの動物行動学者フランス・ドウ・ヴァール⁽⁴⁾やイギリスの発達心理学者サイモン・バロン・コーエンらの研究によつて、その重要性があらためて認識されるようになった「共感力」であるが、法政大学国際文化学部では早くからこれを人材育成の重要な理念と位置づけてきたのである。

「国際社会人」の意義

では、「国際社会人」を育成することには、どのような意義があるのだろうか。その恰好の事例が本書に紹介する藤野巖九郎であろう。

歴史問題や領土問題が再燃するたびにデモや暴動の嵐が吹き荒れる中国。ところが中国の人々の心の中には二つの異なる日本人のイメージがあるという。一つは残虐非道な軍国主義者。もう一つは親切で生真面目な一般国民。戦後、中国政府は日本の軍国主義者と一般国民を区別することで両国民間の和解を図ることを対外交の基本政策としてきた。そして、この政策に従つて学校教育の場でも、戦時下の日本軍の残虐行為を伝える一方、一般国民の親切で生真面目な姿を学ばせることも忘れなかった。この後者の教材として使われたのが、魯迅の短編「藤野先生」である。

明治時代の末、日本に留学した魯迅は仙台医学専門学校「現在の東北大学医学部」で藤野巖九郎とい

う教師に出会う。日清戦争後、中国蔑視の風潮が高まる中、時代に流されることなく、誠意と熱意をもって指導に当たる藤野の姿に感動した魯迅は、二十年後、その思い出を「藤野先生」という作品として発表した。

中国では、建国後間もない一九五二年、この作品が初級中学「日本の中学校に当たる」の語文教科書に収録され、以来今日に至るまで六十年にわたって中学生の必読作品となっている。二〇一一年現在、中国全土で初級中学に在籍する生徒の数は五〇六七万人というから、いまでも毎年一七〇〇万人近い若者たちがこの作品を通じて、魯迅が「わが師と仰ぐ人のなかで、もつとも私を感激させ、もつとも私を励ましてくれたひとり」と称えた日本人の姿を学んでいるのである。

「国際社会人」は必ずしも偉人伝に取り上げられるような偉大な業績を残した人物ばかりではない。しかし、その事績は私たちの気づかぬところで多くの恩恵をもたらしてくれているのである。

本書では、ここで取り上げた二人の人物をはじめ、私たちが手本とすべき計九名の「国際社会人」を紹介している。

著作を通じて植民地支配の横暴と不正義を告発し、朝鮮民族への理解と連帯を訴えた中西伊之助。明治時代に日本に帰化し、知られざる日本の面影を世界に伝えたラファディオ・ハーン。南北戦争前後のアメリカで奴隷たちの自由と解放のために生涯を捧げ、「黒人たちのモーセ」と呼ばれたハリエット・タブマン。グアテマラ内戦下の軍部の弾圧を生き抜き、差別と貧困に苦しむ先住民族の権利回復のために

闘い続けるリゴベルタ・メンチュウ。戦争の悲惨さを目の当たりにし、敵味方の区別なく救護に当たる赤十字社を創設したアンリ・デュナン。言語の違いが惹き起こす民族間の差別や対立をなくすため、中立的な人工言語であるエスペラントを創案したルドヴィコ・ザメンホフ。ソ連時代に反体制派を擁護して国外追放となりながらも、自らの良心に従い行動し続けた音楽家ムステイスラフ・ロストロポーヴィチ。

これらの人物の事績からは、国際社会が抱えるさまざまな問題を、当事者の視点から追体験することができるとともに、私たちが同様の問題に直面したとき、どのように判断し、行動すべきかを考えることができよう。

本書をきっかけとして、一人でも多くの「国際社会人」が育ってくれるとすれば、執筆者一同にとって望外の喜びである。

注

(1) この叢書を刊行するに当たり、本学部では人材育成の目標に掲げる「国際社会人」をこう定義することにした。

(2) Simon Baron-Cohen. *The Science of Evil: On Empathy and the Origins of Cruelty*. Basic Books, 2011, p.16 (未邦訳)

(3) スタンレー・ミルグラム『服従の心理』山形浩生訳、河出書房新社、二〇〇八年

(4)

フランス・ドウ・ヴァール『共感の時代へ―動物行動学が教えてくれること』柴田裕之訳、紀伊国屋書店、二〇一〇年